

**巻頭写真 赤石山脈北西部，巫女淵山のヤツガタケトウヒ・ヒメバラモミ優占林**

(A Mixed stand of *Picea koyamai* Shirasawa and *P. maximowiczii* Regel ex Mast. on Mt. Mikobuchi, central Honshu Japan)

最終氷期最盛期の東日本地域には、トウヒ属バラモミ節、カラマツ属、マツ属単維管束亜属を主要素とし、それにカバノキ科を伴う森林が分布していた。このような樹種組成をもつ森林は、現在の日本列島周辺では報告されていなかった。しかし、本州中部山岳域に点在するトウヒ属バラモミ節を含む林分のなかには、そうした樹種組成をもつものが実在する。そのひとつが赤石山脈北西部、巫女淵山南斜面のヤツガタケトウヒ・ヒメバラモミ優占林（標高 1250–1700m、約 11ha）である。写真 1 は、標高 1250m から 1450m にかけての石灰岩質の岩塊急斜面に成立している森林の様子である。突出した深緑色の針葉樹の樹高は、約 20m から 30m である。深緑色の針葉樹の大部分はヤツガタケトウヒとヒメバラモミで、チョウセンゴヨウやキタゴヨウもわずかに混生する。黄褐色に紅葉している針葉樹はカラマツ、黄緑色に紅葉しているのは落葉広葉樹で、ミズメやケヤマハンノキなどのカバノキ科が多い。写真 2 は、標高 1430m 地点での林内の様子である。ここは、基盤岩や岩礫が露出する場所で、針葉樹の稚樹密度が高い。写っている稚樹の樹高は 0.2m から 2.5m である。左下と右上にみられる深緑色の針葉樹の稚樹はヤツガタケトウヒとヒメバラモミである。写真中央の明緑色の長い針葉をもつ稚樹はチョウセンゴヨウで、そのすぐ左の稚樹はキタゴヨウである。このように後継樹が多いことから、この森林は、継続的に更新している森林であると推察される。こうした樹種組成の森林は、条件さえそろえば長期にわたって安定して存在できる可能性がある。この森林の構造を明らかにし、その成立要因や維持機構を検討することによって、この樹種組成の森林が氷期に分布拡大する原因や過程を理解する手がかりが得られるであろう。

(野手啓行・百原 新・沖津 進 Hiroyuki Note, Arata Momohara and Susumu Okitsu)

